

# JANSZEN zA2.1J

敏感で繊細な  
音色表現を持った、  
ナチュラルな佇まい。  
音楽をじっくり  
聴きこませる 小野寺弘滋

ジャンセンというスピーカーブランドを、私は今回初めて認識したのであるが、同ブランドはESLを世界で最初につくったのだという。

ラウドスピーカーコンデンサー型スピーカーとは、静電気の力を利用して振動板を動かして発音するもの。極めて軽いフィルム状のダイアフラムを全面駆動（コーン型やドーム型といった電磁力による一般的なダイナミック型は、

ボイスコイルボビンがダイアフラムを動かすため、いわば線駆動となる）するESLは、原理的にいって、反応性がよく、とくにローレベルの歪みが少ないとされ、多くの技術者・オーディオファイルを魅了してきた。

ジャンセンの創立者、アーサー・A・ジャンセンは、軍の防衛技術研究の一環として、第二次世界大戦中にESLを開発、1953年には特許を取得し、その翌年、コンシューマー用スピーカーにESLを実用化することに成功したという。59年以降はライセンスを売却したが、ジャンセンのESL技術はその後もスピーカーシステムに採用されたこととて、往年のK1Hのコンデンサースピーカーもジャンセンの流れを汲むものだと知って驚いた次第。

ESLの軽量ダイアフラム（振動板というより振動膜である）は、通常、平面状となるため指向性が鋭くなること、大振幅が苦手なため大音量を出しにくく、低域を伸ばそうとするときわめて大きな面積を必要とするなどのデメリットもあり、また、ダイナミック型スピーカーの性能の著しい向上もあって、近年その数は少なくなっているのだが、同方式でしか実現できないサウンドはたしかにある。

New Audio Components

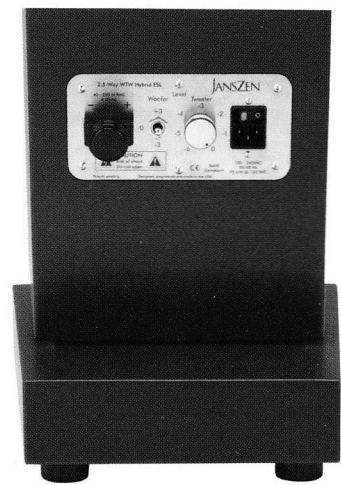
## ジャンセン zA2.1J ¥2,300,000(ペア)

●型式:2.5ウェイ3スピーカー 密閉型 airLayer用ツイーター付き ●使用ユニット:ウーファー・18cmコーン型  
×2 ミッドレンジ・ツイーター 静電型 airLayer・ドーム型 ●クロスオーバー周波数:500Hz, 5kHz ●感度:  
87dB ●S/N:60 ●ツイーター・28kg ●寸法:重量:W300×H1,000×D350mm ●備考:写真はグロス  
スプレー仕上げ 他にグロスティー仕上げあり ●問合せ先:株式会社ゼファン ☎03(5917)4500

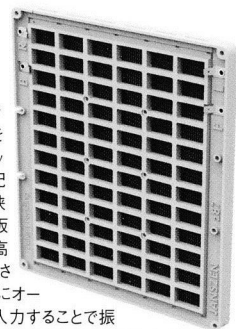
# JANSZEN zA2.1J



エンクロージャのサイドパネル上方には、同社がairLayer(エアレイヤー)と呼ぶアンビエンス調整用ツイーターを装備(片側のみ)。同ツイーターは2kHz~6kHzの帯域に働きかけ、空間の広がり方やスイスポット以外でのリスニングに対して特に効果を発揮するという。エンクロージャのリアバッフル上方に備わるツマミでレベル調整が可能。



リアバッフル下部には、スピーカー端子、電源インレットのほか、ウーファーレベル調整用(⊖3、0、⊕3の3ポジション)のトグルスイッチ、ツイーター(ESLパネル)レベル調整用(0~⊕6の7ポジション)のロータリースイッチが備わる。前記のエアレイヤーと合せてリスニングポイントや設置状況に応じてきめ細かく調整できる仕様だ。



本機に搭載されたESLパネルの図。ESLパネルは網目状のグリッドで固定電極板を支持するユニットを前後に配し、その中に挟まれた振動板(振動膜)に高電圧を供給。さらに固定電極にオーディオ信号を入力することで振動板が前後に動き発音する仕組み。同社で第6世代目にあたるこの最新型パネルは、振動板に適量のダンピングをかけて動作を最適化したり、厚さ3ミクロンの透過膜により、埃や煙などの異物からパネルを保護する構造をとるなどの特徴を持っている。

サイドビュー。本機では通常、前後方向に音を放射するESLパネル(本機では垂直方向に2枚使用)を密閉型エンクロージャに収め、前方のみに音を放射させる構造をとる。また、エンクロージャ自体を後方にスラントさせることで、ユニット間のタイムアライメントを適正化しているという。

2005年、アーサー・ジャンセンの長男である、デイビッド・A・ジャンセンが新たにジャンセン社を設立、同ブランドの伝統を活かし、ESLスピーカーを開発・発売するようになった。本機zA2.1Jは、同社の日本デビュー作である。

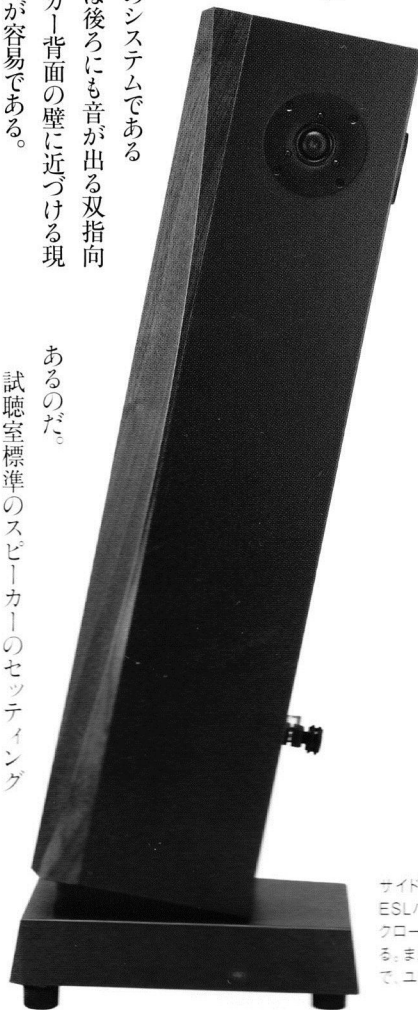
本機は中高域にESL方式を採用しているのが最大の特徴。長い歴史の中で改良が続けられてきた第6世代になるものだけに、本機ではこのパネル状のESLユニットを縦に2枚並べて搭載。高域側の再生帯域を替えているとのことだが(1枚は5キロヘルツまで、もう1枚はユニットの再生限界と思われる30キロヘルツまで)、これは指向性のコントロールを意図しているのかもしれない。

さらに、低域を2基のアルミコーンユニットに担当させ、側面にドーム型ユニットを取り付け指向性を改善するなど、前述したESL

の弱点をたくみに回避する、なるほどと思わせる設計。密閉型のエンクロージャを採用した単一指向性のシステムである

ため(通常ESLは後ろにも音が出る双指向性となる)、スピーカー背面の壁に近づける現実的なセッティングが容易である。

ESLの特質が生きた、ナチュラルな佇まいと繊細な音色表現を持ったスピーカーシステムである。各ユニットはレベル調整が可能のため、それによってレスポンスバランスは変り、とくに側面のユニットのレベルによって音場感だけでなくクリアネスもかなり変化させることができるが、基本的には穏やかで強調感のない、まとまりのよい音である。じっくりと音楽を聴きこませる肌合いのよさが



あるのだ。

試聴室標準のスピーカーのセッティング

位置は壁から離れた状態だが、これをメーカーが推奨する、壁に近づけた位置にして聴いてもいるが、音場感再現が落ちることなく、全体にレスポンスのよい音が得られたこともご報告しておきたい。

パワーアンプの選択はクリティカルなよう形で、本質的にエネルギー的な性格があるアンプで鳴らさないと、ダルな音になってしまうだろう。